信毎俳壇

今井 聖 選

青々と冬の八百屋の春の色　（安曇野市）立沢由美子

白障子母まだ起きてゐる気配　（須坂市）丸山 英子

着ぶくれて閻魔に託す政（まつりごと）　（須坂市）小山 重征

雪降りてラジオの音がクリアーに　（佐久市）小山 嘉章

母の忌や餅花の下吾を生みぬ　（佐久市）西田 和彦

もうもうと息も延（のべ）も寒の牛　（長野市）武田 芳子

注連飾外せばほぐる門構へ　（大町市）原田 勝

公園の便座あたたか寒稽古　（長野市）中村 侑子

東京の隅にゐしこと去年今年　（箕輪町）矢島 七島

寒卵鴉に抱かれ大空へ　（伊那市）中村 茂子

佳作

サラサラとビニールハウスの雪は落つ　（中野市）増田きみ江

雪しまき警笛だけが迫り来る　（長野市）中沢 義寿

選評

一句目、八百屋に並ぶものは季節を超えて新鮮。この「青々」には春を待ち焦がれる人の心が反映している。二句目、白障子の向う側に母はいつも起きていて夜なべをしている。思慕から来る母のイメージそのもの。三句目、「着ぶくれて」は庶民意識。政治の荒廃はもはや閻魔（えんま）さまに託すしかないという嘆きの句。四句目、冬眠する動物への慈愛のまなざしが感じられる。そっとしておいてやれよと。

神野 紗希 選

荒星やテトラポッドに鯨の血　（小諸市）加藤 陽介

暖房を絞りて読めり被災記事　（松本市）小林 幸平

スカイツリーの高さの弥彦村は雪　（上田市）竹内 創造

AIの神となる日も梅の空　（松本市）久我 綺乃

木枯よ山鼠の夢を覚ますなよ　（佐久市）栗林 貞夫

窓に賀詞パンダの顔の園児バス　（長野市）荻原 宏祐

ちゃんちゃんこ労るうちに貰ひ泣き　（須坂市）丸山 英子

十本の爪塗るバレンタインデー　（安曇野市）小坂るり子

子の部屋に恋の予感のシクラメン　（長野市）松本 宏要

首塚の日当るところ蕗の薹　（佐久市）神津 武士

佳作

日脚伸ぶ安曇野の水甘くなる　（松本市）中村 百仙

早く来よ能登に真の春よ来よ　（箕輪町）向山 政俊

選評

一句目、海の荒々しい側面を切り取った。荒星の光が生々しく命の厳しさを照らす。二句目、能登の被災地では、じゅうぶんな暖房が行き渡らず寒さに凍える人も。私もせめて心を寄せて。三句目、弥彦山もスカイツリーも634㍍。都会の塔と比べることで、負けていない弥彦山を誇らしく思う愛が見える。四句目、いつか来るポストヒューマンの時代にも、空は青く梅は咲く。不変を仰ぐ安寧。

坊城 俊樹 選

何事もなきかのごとく大寒へ　（富士見町）鬼束 淳子

地団駄を踏みてヒールの雪落とす　（松本市）竹内 京子

ピアスの穴毀傷にあらず成人日　（佐久市）西田 和彦

遠き日と同じ雪降る過疎の村　（信濃町）松木 信子

妻曰く「女正月よ」と釘を刺す　（飯綱町）仲俣 一重

もうすでに冷たき母の額に触れ　（長野市）小山田満子

極上の寒さ丸ごと召し上がれ　（佐久市）真山 邦弘

熱燗にほぐるる友の訛りかな　（安曇野市）丸山 進也

綿布団母の情けの重さかな　（茅野市）小平 訓男

雪が好き緑と似合ふ色だから　（長野市）北沢 京子

佳作

日脚伸ぶ郵便受けに不在票　（佐久市）佐藤 勝子

炬燵弁慶黍魚子をつまみつつ　（上田市）林 園江

選評

一句目、何事もなかったどころではない。あの巨大な地震の余波がまだ続くのに暦というものは「大寒」へと規則正しく連なる。人間の存在は自然のほんの一粒なのだという感慨。二句目、何か悔しいことでもあったのだろうか。ヒールの雪を落とすのにさえ感情的に。しかしこれも雪国の日常。三句目、ピアスの穴はおしゃれのため。別に毀傷（きしょう）の沙汰があった訳ではないのである。